まえがき

この論集は、日本語文法研究とその関連領域においてながきにわたって先導的な役割を果たしてこられた野田尚史先生の還暦を機に編まれたものです。

野田先生がこれまでに残してこられた業績の数々はいうに及びませんが、先生はこれまで学界においてさまざまなメッセージを発してこられました。殊に、日本語文法学会立ち上げの際のシンポジウムをご記憶の方も多いでしょう。20世紀の終わり頃までに、日本語文法研究の分野が非常に大きな成果を収めてきたことを誇りとしつつも、同じような研究対象を同じような方法ばかりで研究していることへの強い危惧を表し、これからの若手研究者たちが存分に活躍できる文法研究の新しいフィールドを開拓すべきことを主張されました。

われわれ編者は、新しい世紀に入って10年以上が過ぎた頃、このメッセージを今いちど思い起こし、今後のこの分野の活性化のために一石を投じるような、現代日本語文法とその周辺領域の開拓的研究を収める論集を世に出したいと考えるに至りました。そして、これらの領域の第一線で活躍される多様なバックグラウンドをもつ研究者の方々より、この趣旨に対する賛同をえて、幸い、ご執筆の快諾もいただくことができました。

本書『日本語文法研究のフロンティア』が、新たなフロンティアを生み出すきっかけとなることを祈念して、この一冊を上梓します。

2016 年 4 月

庵 功雄　佐藤琢三　中俣尚己

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目　次

[形態論と統語論のフロンティア]

動名詞の構造と「する」「させる」の分布 ..... 田川拓海　1

現代日本語における未然形 ..... 佐々木冠　21

旧 JLPT 語彙表に基づく形態素解析単位の考察 ..... 森　篤嗣　43

名詞並置型同格構造 ..... 森山卓郎　65

文の階層性と文中要素の解釈

——日本語文法研究と生成統語論の実りある協同に向けて—— ..... 長谷川信子　83

[意味論のフロンティア]

日本語に潜む程度表現 ..... 中俣尚己　107

母語話者と非母語話者の逸脱文の意味解釈 ..... 天野みどり　127

構文としての「切っても切れない」 ..... 佐藤琢三　145

[文章・文体・発話研究のフロンティア]

社会科学専門文献の接続詞の分野別文体特性

——分野ごとの論法と接続詞の選択傾向との関係—— ..... 石黒　圭　161

「話しことば的」な文章に見られる話しことばとは異なる表現

——BCCWJにおけるブログの特徴—— ..... 野田春美　183

4 つの発話モード ..... 定延利之　205

[対照研究、習得・日本語教育研究のフロンティア]

日本語と中国語の真偽疑問文と確認文の意味 ..... 井上　優　225

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

教育現場とのつながりを意識した対照研究の試み
——タイ人学習者の「そして」「なんか」の使用問題——
……カノックワン・ラオハブラナキット・片桐　243
第二言語習得研究と第二方言習得研究の統合に向けて
——現状と問題点——……渋谷勝己　269
「産出のための文法」から見た「は」と「が」……庵　功雄　289
非母語話者の日本語理解のための文法……野田尚史　307

あとがき……　327

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

動名詞の構造と「する」「させる」の分布

――漢語と外来語の比較――

田川拓海

1.　はじめに

1.1　目的と主張

本稿では，現代日本語（共通語）におけるいわゆる動名詞（Verbal Noun）と共起する「する」と「させる」の現れ方について，形式的な言語理論の立場から問題提起を行い，生成言語学の枠組みを用いた分析を提示する。具体的には，自動詞タイプ（例：爆発）を他動化する場合には「させる」が現れるのに対して，他動詞タイプ（例：爆破）には「する」を付けるだけで他動詞として用いることができるのは，他動詞タイプの動名詞部分に他動性を担う統語範疇が含まれているからであることを示す。さらに，その分析が動名詞全般に対して成り立つかどうかを確かめるために，漢語系だけでなく外来語系の動名詞を用いた検証を行う。

1.2　現象：動名詞の自他と「する」「させる」

多くのペアで自他の形態的対立を持つ和語系の動詞と異なり，漢語系および外来語系の動名詞はそのような形態的対立がないと言われる。しかしどの動名詞も自他に関して全く同じ振る舞いをするわけではなく，「する」を付けた場合に自動詞あるいは他動詞として用いることができるかについて違いを見せる。

本稿では，「する」を付けた場合に自動詞としてしか用いられないものを「自動詞タイプ」，他動詞としてしか用いられないものを「他動詞タイプ」，自動詞としても他動詞としても用いられるものを「自他両用タイプ」と呼ぶこととする（各タイプに属する語については影山 1996；小林 2004；永澤 2007；森 2014 を参照）。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

現代日本語における未然形

佐々木冠

1.　はじめに

現代日本語動詞の否定形と使役形と受動形には形態素境界に関して二つの分析が共存している。未然形を用いる分析と未然形を用いない分析である。前者を未然形分析，後者を非未然形分析と呼ぶことにする。二つの分析の差異が明確になる子音語幹動詞を例に図式化すると次のようになる。

表 1　未然形分析と非未然形分析

	否定形	使役形	受動形
未然形分析	kaka-na-i	kaka-se-ru	kaka-re-ru
非未然形分析	kak-ana-i	kak-ase-ru	kak-are-ru

二つの分析の違いは接尾辞の異形態にも現れる。母音語幹動詞（見る）の否定形，使役形，受動形は，それぞれ，mi-na-i, mi-sase-ru, mi-rare-ru である。未然形分析では，否定接尾辞に異形態が存在しないことになり，使役接尾辞と受動接尾辞に音節数の異なる {-sase-, -se} と {-rare, -re} という異形態があることになる。一方，非未然形分析では，否定接尾辞に音節数の異なる {-na (-i), -ana (-i)} という異形態があり，使役接尾辞と受動接尾辞に先頭の子音の有無で対立する {-sase, -ase} と {-rare, -are} という異形態が存在することになる。

本稿では，方言の動詞活用形と非標準的な標準語の語形の分析を通して，未然形を認めることの妥当性を検証する。分析の対象とする現象は，否定形のラ行五段化，使役形と自発形のゆれ，否定推量形におけるホストの水平化である。未然形は構造主義以降の日本語研究でその存在を否定されることが多い。本稿では，方言の述語形式や述語形式のゆれ（標準語のそれを含む）を説明する上では未然形の存在を認めた方がよいことを明らかにする。また，

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

旧 JLPT 語彙表に基づく形態素解析単位の考察

森　篤嗣

1.　はじめに

現代日本語に関する語彙調査については，国立国語研究所が長く牽引をしてきたことは誰しも認めるところである。山崎(2013)では，国立国語研究所の語彙調査の系譜を研究所が創設された1948年から順に，準備期(1950年以前)，発展期(1950年から1964年)，展開期(1965年から1970年代)，停滞期(1980年代前期)，探索期(1980年代後期)，回帰期(2000年代)と，６つに区分して示している。この中でも大きな転機は，展開期の1965年に大型計算機(コンピュータ)が導入され，２種類の調査単位(現在の「長単位」「短単位」につながる単位)が規定されたことであろう。

その上で，山崎(2013：149)では「今後の語彙調査」として，「今後，語彙調査は大きなプロジェクトとしては行われることはないであろう。これは，語彙調査が不要になったためではなく，電子化データが容易に入手でき，語彙調査が行えるツールも整ってきたため，個人レベルでも語彙調査が十分に行えるようになったためである」と指摘している。本稿で課題とするのは，この「語彙調査が行えるツール」すなわち「形態素解析器」の「精度」についてである。

現代日本語に関する研究でコーパスや形態素解析器が使われる研究は非常に増え，さらに日本語教育に応用するという研究も多く見られるようになってきた。一方で，形態素解析器による形態素解析単位については，山内(2008：152)でも「それほど使いやすいものではない」と指摘されるように，日本語母語話者の直観に沿うとは言い難いのが現状である。とりわけ，日本語教育という応用分野での使用を考えると，様々な課題がある。

ちなみに，山内(2008)で検討されているのは，形態素解析器 ChaSen と ChaSen に搭載された形態素解析辞書 IPAdic の組み合わせであるが，山崎

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

名詞並置型同格構造

森山卓郎

1.　はじめに

日本語には名詞が並置されるという構造がある。ここで並置というのは，アクセント核が融合せずに，小さなポーズを伴って別個に発音される，独立した名詞が並ぶ構造である。独立した名詞を並置する場合，表記的には「・」でつなげられることもある。名詞の並置構造は，ある意味で最も単純な構造であるが，様々な意味関係が観察される。例えば，

（1）　仮設店舗が軒を連ねる宮城・名取の「閖上さいかい市場」
（「復興へむけて頑張ろう　みやぎ」ポスター，東京メトロ大江戸線，2015年11月）

の場合，「宮城・名取」は「宮城に属する名取」という所属関係となっている。

これに対して，

（2）　津波から１年後，漁師町・閖上地区にあった商店がここで事業を再開しました。（同）

の「漁師町・閖上地区」では，「漁師町である閖上地区」という同一関係が結ばれ，全体が一つの名詞句相当の位置づけとなっている。この「漁師町・閖上地区」のように，２つ以上の名詞が同一関係で結ばれて名詞句相当の成分を構成する場合，その２つの名詞の関係は同格といわれる（ただし，２つの名詞が全くの同資格というわけではない。後述）。

特に同一の指示対象を持つ名詞が並置される場合を名詞並置型同格と呼ぶことにする。例えば，田中先生という人物が学生部長である場合，

（3）　学生部長，田中先生

のように言うことができる。これは，

（4）　学生指導の鬼，田中先生

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

文の階層性と文中要素の解釈

――日本語文法研究と生成統語論の実りある協同に向けて――

長谷川信子

1. はじめに

野田(2000)は，現代日本語を扱う文法研究は，分野の成熟，研究者の増加，日本語教育の必要性など，研究環境が整ってきているにもかかわらず，以前のダイナミズム・面白みが欠けつつあると警鐘を鳴らし，研究領域の拡大，課題設定の創造性，研究手法の開拓などの観点からの活性化の必要性を指摘している。生成統語論研究を専門とする筆者には，野田の指摘する日本語文法研究の「手詰まり感」をどこまで共有できているかは分からないが，実は，生成文法・統語理論においても，その発祥から半世紀以上を経て，当初の言語の見方，分析法における圧倒的な斬新さ，理論体系構築と共に明らかにされた新たな規則性や体系，言語現象の発掘，それらから得られた知的興奮などが，大幅に減退してきている[1]。

日本語生成文法と日本語文法研究は，共に「日本語の統語的文法現象」を扱ってきてはいるが，前者の考察対象はあくまでも「(その時々の)理論発展上の興味や分析可能性」に限られ，後者は，理論研究で得られた知見や記述的考察への応用可能性が十分に検討されてきているとは言いがたい。このことは，両分野の研究の目的や目指す方向性が異なることから，当然の帰結とも言える。しかし，もし，両者の研究領域それぞれに「手詰まり感」が感じられるのなら，それは，両者の「垣根」を越えて，二つのアプローチが，相補い，片方からだけでは得られない一般化や規則性が獲得できるような関わり方を目指すことから，打破できるかもしれない。以下では，そうした可能

1　その原因の一つは，生成文法の究極の目的の「ヒトの認知基盤としての言語の解明」が生物的進化・発展の視点を含めた「生物言語学」の課題設定に移行してきていることと無縁でないのが，多少皮肉である。生物言語学の目的と，個別言語の現象の丹念な考察からの理論化という「人文学的言語学」の研究興味が乖離しはじめているのである。生物言語学の動向については，藤田他(2014)を参照されたい。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

日本語に潜む程度表現

中俣尚己

1. はじめに

日本語教育のための日本語学研究は，学習者の誤用から出発すべきであろう。学習者にとって習得が容易な項目に関する研究は，日本語学習者や日本語教師に還元するものは少ないと考えられる。しかし，一口に誤用と言っても，野田(2005)が夙に指摘するように，コミュニケーションにあまり影響を与えない誤用と，重大な影響を与える誤用が存在する。例えば，格助詞の「に」と「で」の誤用は，大きな誤解を生むことは少ないだろう。

(1)　にほんはーあー，埼玉県いわきしー，で住んでいます

(KY コーパス CIM01)

では，以下の例はどうだろうか。これは筆者が実際に聞いた非母語話者の発話である。

(2)　この程度の論文は，なかなかいいですね。

筆者はこの発言の前半部，「この程度の論文は」を聞いた時点で，否定的な評価が下されることをほぼ確信した。最後まで聞いてなお，肯定的な評価であるという解釈には至れなかった。(2)の例文がどうにも奇妙なのは，「この程度の」という低程度の評価表現が，述部のプラスの意味の表現を上書きしてしまうからである。(3)は実質語で上書きが行われた例である。

(3)　上述の「也」の母語転移と考えられる語順不適切型が3例含まれ，誤用全体の３％弱を占める。

これは筆者が非母語話者の論文のネイティブチェックをしていた時に発見した例であるが，どうにも違和感があった。確かめると，この文の意図は「語順不適切型が少ない」ということであった。３％というのはなるほど少ない。しかし，「占める」という動詞を用いたために，「少ない」という客観的な意味が「多い」という主観的な程度性によって上書きされてしまったので

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

母語話者と非母語話者の逸脱文の意味解釈

天野みどり

1. はじめに

母語話者の言語運用は柔軟なものであり，規範から逸脱し不自然さを感じるような言語表現であってもその意味がどのようなものであるかを理解することができる。それはなぜなのだろうか。本研究では実際に現れる逸脱文の考察，日本語母語話者と非日本語母語話者（日本語学習者）に対する意味解釈調査を通し，意味を解釈するとはどのようなことなのかを日本語文法論の立場から考えてみることとしたい。

本研究では，まず逸脱的な特徴を持つ「のが」文と「それが」文を対象にしてそれぞれの意味を記述し，その意味解釈がどのように行われるのかを考える。その上で日本語母語話者と非日本語母語話者に対する調査により，逸脱的な「のが」文と「それが」文の意味解釈に違いがあるかどうかをみる。その結果から，逸脱性の強く感じられる文の母語話者の意味解釈では，慣習的な「構文」の意味が重ねられ，調整的な意味解釈が行われることを述べる。

逸脱的な「のが」文とは以下の(1)，逸脱的な「それが」文とは(2)のようなものである。どちらも「のが」「それが」の後続に第２の「が」が現れ，「のが」「それが」が主格だとするとそれと結びつく述語句が後続に無いように見えるものである。この点を捉え，本研究では逸脱的と呼ぶ。

(1)　ホプキンズは十九世紀のイギリスの詩人。ながいあいだマイナーな宗教詩人としか考えられていなかった**のが**，再評価の声**が**高い。
（「トリエステ」）

(2)　10年ほど前までのドイツは恵まれた体格を生かした〝質実剛健〟のサッカーが特徴だった。**それが**，ここ数年は技術のある選手**が**増えた。今大会は徹底してパスをつなぐ攻撃サッカーを貫いた。
（「朝日」）

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

構文としての「切っても切れない」

佐藤琢三

1.　はじめに

日本語においては，前件で働きかけと結果の達成を述べながら後件で対象における結果性を否定する形をとる文が，母語話者によってはかなりの程度許容される場合がある。

（1）　糸を切ったけれど，切れなかった。

（2）　じゅうたんを燃やしたけれど，燃えなかった。

本稿では，このような現象を「結果キャンセル文」と呼ぶことにする。この現象はこれまで，多くの研究者の関心事となり，活発に議論されてきた。後述するように，その際の主たる論点はこの現象が日本語の動詞の意味の曖昧さの表れであるというものであった。すなわち，相応の程度に話者がこれらの文を許容するのは，日本語においては動詞の意味構造における境界が曖昧なためであるとされてきた。

本稿は，これに対し多くの母語話者が一定の割合でこの種の文を許容するのが事実であることは認めつつも，結果キャンセル文により動詞の意味のあり方を論じるのは不適切であるという主張をする。先行研究のような文と意味の関係のとらえ方は，文全体の意味が文を構成する語の意味の総和に還元されるという暗黙の前提にたつものといえよう。しかしながら，近年の意味研究において，言語形式全体の意味はそれを構成する諸要素の意味の総和に還元できるとは限らず，その全体の形式自体が意味を有する構造であるとの見方がされるようになっている。本稿はこのような意味観にたち，結果キャンセル文は「～シテモ～シナイ」という構造自体が意味を有するものであり，その意味はこれを構成する動詞等の意味の総和に還元することは不適切であるという見方を提示するものである。

本稿の構成は以下の通りである。**2.** では，結果キャンセル文に関するこれ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

社会科学専門文献の接続詞の分野別文体特性

――分野ごとの論法と接続詞の選択傾向との関係――

石黒　圭

1.　はじめに

本論文は，社会科学の専門文献に見られる接続詞の分野別の文体特性を明らかにすることを目的としたものである。すなわち，社会科学には，商学(経営学・会計学)，経済学，政治学，法学，社会学などがあり，そうした分野ごとの接続詞の特徴を，自分たちで設計した言語データベースをもとに明らかにすることを目指す。こうした研究を志す背景には，近年のコーパス言語学の隆盛に一抹の不安を覚えるからである。

言語コーパスの大規模化が進むにつれ，語彙の文体特性について，データに基づき実証的に把握することが可能になり，事実，そうした研究が急増している。そのこと自体は喜ばしいが，大規模化が進んだ結果，かえって見落とされている言語事実も少なくないように感じられる。

もし大規模なコーパスを扱いたいのであれば，「新聞」「小説」「論文」「白書」のようないわゆるジャンルに換言して説明する(たとえば石黒ほか 2009)よりも，文体印象に依拠した形態的な特徴に着目し，整理したほうが正確に文体を把握できるように思う。たとえば，柏野(2013)では，「専門度」「客観度」「硬度」「くだけ度」「語りかけ性度」の五つの尺度から文体的特徴を捉える試みが行われており(石黒 2015 も参照)，今後，こうした方法が洗練され，さらに深まることが期待される。

他方，言語コーパスの整備がこれだけ進むと，そのコーパスのアノテーションを暗黙の前提として研究が行われやすい。とくに，日本語の研究に取り組みはじめたときからコーパスが存在していた「コーパス・ネイティブ」の研究者は，それぞれのコーパスに込められた設計思想や限界を顧みずに，現存するコーパスを操作・加工することばかりに意識が向きがちである。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

「話しことば的」な文章に見られる話しことばとは異なる表現

――BCCWJにおけるブログの特徴――

野田春美

1. はじめに

野田(2011)では，記述的文法研究の今後の可能性として次の３つを挙げた。複数の文法カテゴリーにまたがる研究，バラエティについてのきめ細かな記述，実際の運用や実例を重視した研究である。これらのうち本稿では，「バラエティについてのきめ細かな記述」と「実際の運用や実例の重視」に関わるテーマをとりあげる。

言語のバラエティの１つとして，いわゆる「話しことば」と「書きことば」の違いがある。両者の区別が文字か音声かというメディアの違いだけで説明できるような単純なものでないことは，定延(2003)などで示されているとおりである。

両者の関係は，話しことばのなかにもフォーマルな「書きことば的」な発話が見られ，書きことばのなかにもカジュアルな「話しことば的」な文章が見られるといった連続性だけで説明できるものでもない。

そこで本稿では，「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(以下，「BCCWJ」)におけるブログの表現を考察することで，「話しことば的／書きことば的」という区別だけではとらえきれない問題を考える。BCCWJには，書籍，雑誌，新聞などの書きことばらしい書きことばだけでなく，それらを補う多様なデータが収録されており，ブログ(Yahoo! ブログの2008年のデータ)はその１つである。

ブログの文章について，岸本(2005：16)は，品詞，語種，文法，字種の４つの側面から調査を行い，「ウェブ日記は，すべての項目にわたって話しことばを色濃く反映した様相を呈していることが数値として明らかになった」と述べている。この指摘は基本的には妥当だと思われるが，ブログには実際の

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

4つの発話モード

定延利之

1. はじめに

発話単位と言えば，多くの読者がまず思い浮かべるのは「音節」のような不変の発話単位だろう。ここで「不変の発話単位」というのは，どのような発話にも見られる，いわばモノを構成する原子のようなものを指している。

日本語には，こうした不変の発話単位とは別に，車を運転する際に次々と切り替える「ギア」のような，可変的な発話単位がある。ギアを切り替えれば運転の調子が変わるように，発話単位を切り替えれば発話の調子も変わる。

英語はしばしば節(典型的には主語＋述語)を単位として発話されると言われるが(例：Chafe 1980, 1987)，日本語は節よりも小さな文節(典型的には名詞＋格助詞）がともすれば発話の単位となると言われる(Clancy 1982；Maynard 1989；Iwasaki 1993等)。しかし現在，日本語の研究は圧倒的に節に集中しており，それ以外の可変的な発話単位にはほとんど注意が払われていない。この論文では，日本語(共通語)には，可変的な発話単位が4種あり(文字・イントネーション・節・文節)，これらのどれを単位とするか(以下「発話モード」と呼ぶ)の違いが我々の想像以上に大きいことを論じる。さらに，そのうち1つの発話モード(文節モード)を日本語教育に活かす可能性と方法を論じる。

2. 文字モード

最初に取り上げる発話モードは文字モードである。このモードは，話し手がことばを1文字ずつ，「意味を意識せずに」発するという発話モードである。この発話モードの場合，全ての文字は頭高型アクセント(第1モーラにアクセント核があり，第1モーラだけが高いアクセント)で発せられるという大きな特徴がある。アクセント核(そこまでは高く，直後から低くなる部分)の

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

日本語と中国語の真偽疑問文と確認文の意味

井上　優

1.　問題

中国語には，話し手の種々の心的態度を表す文末助詞（中国語文法では語気詞）がある。真偽疑問文や確認文をつくる場合も，文末助詞“吗 ma”（か），“吧 ba”（だろう，よね）を用いる[1]。

（1）　这　是　你　　的　吗？　（真偽疑問文）
これ　だ　あなた　の　か
（これはあなたのですか？）

（2）　这　是　你　　的　吧？　（確認文）
これ　だ　あなた　の　だろう
（これはあなたのでしょう？／あなたのですよね？）

（3）　（真冬に薄着をしている人に）
你　　穿　那么　一点儿，不冷　　吗？冷　吧？
あなた　着る　そんな　少し　　寒くない　か　　寒い　だろう
（そんな薄着で寒くないんですか？　寒いでしょう？／寒いですよね？）

本論の出発点は，真偽疑問文と確認文の使い分けに関係する次の疑問である（質問中の“没事儿”は「なんでもない，なんともない」の意）。

（4）　ドラマの中で，車と自転車の事故が起きました。加害者が被害者に向かって「没事儿吧」と言ったのですが，訳が「大丈夫ですか」でした。この訳は正しいですか？　単純に「没事儿＋吧」と考える

1　“吧”は，確認の用法のほか，“走吧”（行こう：勧誘），“我来吧”（私がやろう：申し出），“你放心吧”（安心して：指示），“大概是小王的吧”（たぶん王さんのでしょう：推量）のような用法もある。本論で「だろう」，“吧”と言う場合は，確認の「だろう」，“吧”を指す。“吧”は疑問符を付さないことも多いが，本論では（引用の場合を除き）確認の“吧”には疑問符を付す。例文の逐語訳は「だろう」で統一する。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

教育現場とのつながりを意識した対照研究の試み

――タイ人学習者の「そして」「なんか」の使用問題――

カノックワン・ラオハブラナキット・片桐

1.　はじめに

対照研究は言語間の類似点と相違点を明らかにする研究分野であると同時に，外国語教育の現場に貢献する役割を持つ応用分野でもある。日本語教育現場においても，対照研究が持つ現場への応用的な役割が期待されている。しかし，太田(2002)や石田(2010)が指摘しているように，対照研究の成果を日本語教育現場へと還元して積極的に活かそうという試みはまだ不足している。熊谷（2002）は，特定の母語を持つ学習者の問題や指導法を扱う149件の日本語教育論文を対象に，対照研究の成果の利用状況を調べた。その結果，対照研究の成果を利用した論文は半数程度にとどまると報告している。

熊谷(2002：28-31)ではこの結果に対して，日本語教育に対照研究の成果をよりよく活かし，対照研究も日本語教育からの知見を得るために，双方で問題を共有し意見・情報を交換し，ともに取り組んでいくことが不可欠だとしている。また，「言語対照研究」と「学習者研究」と「指導法研究」を包括した日本語教育のための対照研究の可能性も提示し，研究と教育のどちらか側ではなく，この三つの研究が組み合わされることが必須だとも述べている。

本研究では，こうした現状を踏まえ，日本語教育現場とのつながりを意識した対照研究をめざす。そのために，研究対象の問題点の絞り方は，研究者または教育者の側から出発するのではなく，教育現場にいる学習者のコーパスを用いて問題点を抽出する方法で進める。また，タイ人学習者研究と日タイ語対照研究の両者を相互に関連させた形で分析考察を行う。さらに，得られたタイ人学習者研究と対照研究の知見を活かし，タイの教育現場のために具体的な指導のポイントを提案する。

以下，**2.** で研究対象の問題点を述べる。**3.** で誤用分析の観点で問題点を分

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第二言語習得研究と第二方言習得研究の統合に向けて

――現状と問題点――

渋谷勝己

1. はじめに

現代の日本社会に生まれ育ったわれわれは，幼いときから生まれた土地の方言を習得するとともに，テレビや学校教育などをとおして日本語の標準語を身につけている[1]。また，人の移動を特徴とする現代社会においては，さらに，生まれた土地からほかの土地へ移住し，その移住先の方言を身につけることもある。このようにしてわれわれ「日本語母語話者」は，方言や標準語などのさまざまな日本語変種を身につけることによって，日本語の多変種能力をもつ言語使用者となる。

一方，われわれは，小学校や中学校で英語を学び始め，大学ではさらに第二外国語や第三外国語も学ぶことがある。このようにして学んだ外国語の能力は個々人によって差があるが，いずれにしてもわれわれは，多言語・多変種能力をもつ言語使用者であることには変わりがない。

ところで，われわれは，母方言以外の，日本語の第二方言や標準語(以下，標準語を含めて便宜的に「第二方言」と呼ぶ)をどのようにして習得するのであろうか。この習得のプロセスは，第二言語や第三言語(以下，まとめて「第二言語」とする)を習得するプロセスとは異なるのであろうか。

第二言語習得(second language acquisition。以下 SLA とする)と，標準語や移住先の方言を習得する第二方言習得(second dialect acquisition。以下，標準語の習得を含めて SDA とする)は，一般には(直感的に)質の異なる事象

1　本稿では，英語圏で行われた研究も考察の対象とするため「標準語」という用語を使用し，「共通語」という用語を使用して行われた国内の方言学関係の研究に言及するときにのみ「共通語」という用語を用いる。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

「産出のための文法」から見た「は」と「が」

庵　功雄

1.　はじめに―「は」と「が」は本当に難しいのか―

本稿で取り上げる「は」と「が」は日本語学習者にとって使い分けが難しいものの代表と見なされている。また，韓国語にはほぼ日本語の「は」と「が」に相当する助詞の使い分けがあるため，「韓国語話者にとってはやさしいが，それ以外の話者にとっては難しい」とも言われている。

確かに，「は」と「が」に当たる助詞をともに持つのは，日本語学習者が多い言語の中では韓国語のみであり，その点では「は」と「が」の使い分けは難しいと考えられる。しかし，本稿の「産出のための文法」という立場からは必ずしもそのように考える必要はないというのが本稿の主張である。

2.　先行研究

「は」と「が」の違いに関する議論は日本語文法研究における最も大きな論点の１つであり，これまで，特に日本語学(国語学)の中で数多くの研究が行われてきた。

2.1　日本語学的研究

日本語学(国語学)的な立場からの研究としては，「は」を係助詞，「が」を格助詞とした山田(1908)以来多くの研究がある。代表的なものには，三上(1953, 1960, 1963)をはじめとする三上章の一連の研究や，Kuroda(1972)，尾上(1973)，久野(1973)，仁田(1979＝2009)，益岡(1987)などがあり，野田(1996)がそれまでの研究の適切な統括を行っている。

2.2　日本語教育的研究

日本語教育の観点からの研究はあまり多くなく，教材としての野田(1985)

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

非母語話者の日本語理解のための文法

野田尚史

1.　多様な「文法」の必要性

「文法」は，研究を進めていけば理想的な一つの文法ができあがるというものではない。何のために「文法」を作るかによって，それぞれの「文法」の内容は大きく違ってくるはずである。

野田尚史(2007, 2013)でも指摘されているように，従来の一般的な文法と，日本語を母語としない人たちが日本語を習得するための文法では，さまざまな点が違って当然である。

たとえば現代日本語の受動文を例にすると，従来の一般的な文法では，「純くんが愛ちゃんにふられた」のような受動文を「愛ちゃんが純くんをふった」のような能動文との関係から説明することが多い。その場合，能動文から受動文を導き出す規則として，少なくとも次の(1)から(3)のような3つの規則が必要になる。

(1)　動詞の形についての規則:「ふる」を「ふられる」に変える。

(2)　助詞についての規則:「愛ちゃんが」を「愛ちゃんに」に変え，「純くんを」を「純くんが」に変える。

(3)　語順についての規則:「純くんが」を「愛ちゃんに」より前に置く。

しかし，日本語を母語としない人たちは，このような規則を教えられても，すぐに受動文を使えるようにはならない。「られ(受身)」は初級の日本語教科書で扱われているが，山内博之(2005)によると，日本語学習者にOPI(Oral Proficiency Interview)による会話テストを行うと，初級や中級レベルの学習者の会話には「られ(受身)」は出てこず，上級レベルになって初めて現れるということである。

そうであれば，初級学習者のための文法では，「純くんが愛ちゃんにふられた」のような文を受動文とは考えずに，「ふられる」という動詞が使われた普

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers